

一人一人が自分らしく輝けるために

1. 教育を考える一言

「臼井鉄三にてこずっているようだけど、ぼくの経験からいうと、ああいう子にこそタカラモノはいっぱいつまっているもんだ」

2. 背景

出典は、小説『兎の眼』です。教員ヤクザと呼ばれる足立先生が、大卒新任の小谷先生に向けて言った一言。二人が勤務する学校は、塵芥処理所のすぐ隣に位置しており、そこで働く貧困世帯の子どもも多く通っています。鉄三も、そのうちの一人です。小谷先生は、彼の常軌を逸した行動に大変手を焼いていました。そんなある日、小谷先生は、担任のクラスの子どもの書いた作文を足立先生に見てもらうことにしました。子どもの作文を読んで、足立先生は、「いい作品だね。こういう作品がうまれるところをみると、まだ、タカラモノをねむらせているかもしれない」「ほかにもよい作品があるのに、あなたが見落としているかもしれないということ。作品だけでなしに人間もね」と言いました。そして、それに続く言葉として、上に紹介した一言を発したのです。

3. 考察

この物語は、約40年前である1974年に発表されたものです。足立先生の言葉には、「どんな人間や子どもにもそれぞれのよさがあるから、それを生かして一人一人が輝けるようにしなければならない」といったメッセージが込められていますが、こうしたメッセージはすでに使い古されたものであって、なんら新鮮味がないと感じるかもしれません。しかし、そのように、一人一人が自らの個性を輝かして生きることの大切さを誰もが認めているにもかかわらず、社会全体としては、それとは反対の方向へと進んでしまっているような気がしてなりません。

日本では、1990年代なかば以降、経済のグローバル化による競争圧力の増加や、国家財政の悪化によって、官・民を問わず不安定な非正規雇用が拡大しました。金銭的・時間的な余裕の欠如から、職場における人材育成や人間形成が十分になされないケースも多くなり、低所得者層を中心として、仕事を通じて自分らしく成長していくことが困難な状況にあります。一方、企業等の中枢を担っている、もしくは担うことを期待されている人々については、長時間労働・過重労働が横行しており、過労死や過労自殺の増加が顕著です。

教育の世界でも、新自由主義的な教育改革や少子化による学生（生徒）獲得競争のさなか、とりわけ大学や高校は、就職率や進学率などの眼に見えやすい成果を重視することが多くなってきているように思われます。さらに、学生・生徒やその保護者の側では、経済状況が悪化するなかで、「なんとか正社員に」などの安定志向が広がりを見せており、学生・生徒たちは、時には自分の内面や外見を取り繕ってまでして、労働社会に適応せざるを得ない状況にあるといえます。

「一人一人が自分らしく輝く」ことは、個人にとってだけでなく、身の回りの人間、さらには社会全体にとっても望ましいことであると、僕は信じています。しかし、以上述べてきたように、現在、様々な外的な条件によってそれが難しくなっています。こうした現状を変えるため、教育には何ができるのか。それを考え続けていきたいです。